

ケアセンターけやき

症例概要	利用者	90歳台（男性 要介護5）
	利用期間	令和6年2月～令和6年7月
	既往歴	前立腺肥大症 下肢閉塞性動脈硬化症 脳幹梗塞 高血圧症 認知症 完全房室ブロック（ペースメーカー植込み）
	経過	2023年10月肺炎・心不全にて急性期病院に入院。リハビリ目的で、竹川病院へ転院。BNP高値で心負荷かけられず、階段昇降必須のご自宅には帰ることが難しいとされた。また、認知機能の低下にて覚醒のムラがあることから、経口摂取量が少なく点滴を行っており、退院先は介護医療院を検討された。しかし、以前からケアセンターけやきの居宅ケアマネージャーや、通所リハビリを利用していることから、なじみのある当施設をご家族が希望され2024年2月入所となる。

内 容

脳幹梗塞後、介護保険サービスが必要となり、2017年より、ケアセンターけやき居宅ケアマネージャーと通所リハビリの利用開始となる。

長男家族と同居。2人の娘さんは隣県に住んでおり、頻繁に行き来し仲の良いご家族である。

入所当初は、水分量は少ないものの、食事はムラはあるが全量から5割程摂取できていたが、3月頃より徐々に食事が低下していった。医師からは老衰の状態と説明を受ける。点滴を検討したが、抹消の血管確保は難しく、CVまではしないとご家族の希望だった。しかし、ご家族は父親への思いが強く、理解はできているが状況を受け止めきれない様子だった。食事がすすまないことを大変心配され、時間があれば代わる代わる差し入れをもって面会に来られた。こちら、少しでもご本人の様子を伝えたく、頻繁にMeLL+ファミリーにてご様子を伝えた。通いなれた通所リハビリには、リハビリ室まで行く体力が乏しいため、居室内でのリハビリとなったが、リハビリスタッフが来るのをとても楽しみにされていた。孤独にならないよう体力が許す限り離床し、共有スペースに来ると大きな声でみんなに挨拶されていた。大好きな競馬のTV中継を一緒にみていると、職員を息子さんと勘違いする場面もあった。ご家族とは密に話し合いを行い、長男さんより「家庭のような雰囲気なら食べられるのでは」と提案があった。しかし、嚥下機能が低下しているため、居室でご家族だけでは不安とのこと。共有スペースの食堂の一角に、テーブルとイス、ソファを置いてご自宅のような雰囲気を再現した。5月中旬頃には、ほとんど摂取しなくなり、竹川病院医師より再度説明を受け、積極的な医療行為はせず、施設での看取り開始となった。

最期まで、通常の生活が送れるようご本人の意思を確認しながら離床したり、ほんの少しの水分をお口に運んだ。ご逝去される前日には、リハビリ中にゼリーが食べたいと言われ、リハビリスタッフが少しずつ介助し食べることが出来た。普通の暮らしをし、穏やかに息を引き取られた。最後となったMeLL+では、ご家族から「父の親身になって出来る限りの事を精一杯やってくださったから」との感謝のお言葉を頂くことが出来た(原文添付)。

長年、ケアセンターけやきの居宅、通所リハビリを利用していたことから、通いなれたけやきへの入所を希望され、人生の最期を顔なじみの職員や大好きなご家族と過ごされました。複合施設であるケアセンターけやきでワンストップで支援し、ご本人の笑顔が見られ、ご家族より感謝の言葉を頂いたのはキラキラ介護に値するとし、推薦させていただきます。